

35 【ぼくはつ】

どうしてでしょうか。

きっかけは、懐爺の太田道灌の話だったかもしれません。

母親といっしょに、中山へきのこ採りに行きました。

何であれ、母親と行動を共にするのはいい気分でした。

何の心配もなく、目的だけをかんがえていられる。

母親の匂いは、何よりも安心の匂いでした。

その日母親は、舞茸(まいたけ)を採るつもりだったらしいけれども、ぼくは松茸(まつたけ)をねらいました。

時季が少しだけ早かったらしく、いくら探しても松茸はみつからず、〔猿の腰掛け〕ばかりが目について困りました。

これは猿のいたずらにちがいない、松茸は猿がみんな採ってしまったんだと残念でした。

それでも猿が見逃した松茸があるはずだと、懸命に探しました。

そのうち妙なきのこに出逢いました。

逆さまに生えたきのこや、虹色のきのこや、おならを発するきのこには逢ったことがあるけれども、こんなきのこは初めてでした。

なにしろ、みているだけで、みるみる大きくなる。

いつのまにかぼくの背よりも大きくなったので、母親を呼びました。

「そいつに触っちゃあかん」

母親は血相変えてさげびました。

「もうさわっとる」

ぼくはいいました。

おばけきのこは、巨大化しました。

さらにさらに大きくなりながら、このきのこは、泣いているのか、汗をかいているのか。

黒い雨が、ぼくに、ぼくの全身にふりそそぐ。

げっげっげ

げんげんげん

げげんげげん

げんげんげげんげん

ぼくは母親に促されるまま、いっしょに逃げました。
逃げたけれども、ちっともこわくはありませんでした。
ただ、黒い雨は、ふいてもなかなかとれません。
夕方、懐爺のところに行きました。
母親ときのご採りに行った話をしました。
「おばけきのこをみたんじゃ」
「触ってはいませんよね」
「あんなもん、さわるかい」
ぼくは嘘をいいました。
「それなら問題はないでしょう」
ぼくはぼくの身の上に、問題が出ることをおそれました。
「もんだいたあ、なんじゃ」
「放射能ですよ。そのきのこは【ぼくはつ】、別名【げんぼく】です」
「ほうしゃのうたあ、なんじゃ」
「金ちゃん、学校で勉強しませんでしたか。日本が戦争に負ける直前、
広島と長崎に原爆を落とされたんです。放射能はその原爆から吹き出し
て、人間にひどい害をおよぼすのです」
「なるほど。あのおばけきのこがおちたんか」
「落ちたのではなく、米国に落とされたのです」
「ならば【ぼくはつ】は、ほうしゃのうのおばけか」
「広島と長崎の次は、この村というわけです。でも害にあったのは、幸
運にも、どうやら金ちゃんだけですね」
「がい、たあ、どんながいなんじゃ」
ぼくは勇気をだして、きいてみました。
「それは、わたしの口からはいえません」
珍しく懐爺は、苦々しい顔つきをしていました。
いずれ駄目になる自分を、ぼくは想像しました。
おそろしいよりも、口惜しいおもいでした。
「【ぼくはつ】をやっつけるには、どうするんかい」
ぼくは今までで一番、ききたいことをききました。
「他のおばけなら何とか退治できます。退治できないのが【ぼくはつ】
です。だから困るんです」

懐爺は困った顔で答えました。

「めんどうじゃのう」

困っていたのは、ぼくのほうでした。

それでも懐爺は、黒い雨を、おしっこでぬらした雑巾（ぞうきん）をつかって、ぼくのからだからぬぐいとってくれました。

それから懐爺は、ぼくにささやいたのでした。

「これは金ちゃんだけの、秘密（ひみつ）にしておいてくださいね。わたしの祠は、この世界でたったひとつの【ぼくはつ】よけなのですよ。ただ、そんなものがあって、自分だけ助かっても、どうしようもない。【ぼくはつ】を【ぼくはつ】させないことのほうが、大切なんですから。そのための方法をこれから、金ちゃんにだけおしえます。なぜなら【ぼくはつ】が、それを耳にして、知恵をつけてしまったら、もう人類絶滅（じんるいぜつめつ）ですからね。【ぼくはつ】というおぼけは、退治できないけれども、発生させなければいい。そうすれば退治する必要もありませんからねえ」

ぼくは、その方法をくわしくきいた。

それでいままでに、何度か、表から裏から、横から斜めから、各国の指導者（しどうしゃ）に、はたらきかけてきたけれども、だれも相手にしてくれなかった。